

木沢村の講中と葬送儀礼

民俗班 (徳島民俗学会)

澤田 順子*

平成16年、木沢村は未曾有の台風による災害で道路が寸断され、調査に支障をきたした。山奥の地域に入ることは困難で、余儀なく限定された地域のみ調査になってしまった。

幸いにも、聞き取り調査に協力していただいた方が、『木沢村の民俗』(昭和63年3月、木沢村教育委員会編)の執筆者であり、村内各地域の事情を把握しておられ、ご教示いただくことができた。とはいえ、実地調査が木頭・坂州のみだったので、十分な調査とはいえないが、ご容赦願いたい。

1. はじめに

村内(351戸、923人、平成16年12月現在)ほとんどの家が仏教、真言宗であり、人口の多い坂州向エでも54軒中、真言宗51軒、神道2軒、創価学会1軒である。従って葬儀も仏式の同じような方法で行われている。時代とともに変化はしているが、本村にはまだ古いしきたりが残っている。『木沢村誌』(木沢村誌編纂委員会編、昭和51年1月)によると、昭和51年当時、まだほとんどが土葬だったようだ。その後の交通・通信手段の発達で葬儀を簡便化させることにつながった。

ここでは、地域の人たちが助け合っていた、土葬時代の葬儀のあり方を主に、大きく変化した現在の状況を括弧内に加筆し、対比させることにした。

村内には何組もの互助組織、講組み(株内)があり、今でも冠婚葬祭に関わりをもち、中でも葬式は主導権を持ち、葬儀の手はずを整える役を担っている。

2. 講組(株内)について

現金収入が見込めない時代は、各人自らの経済力だけで事に当たるのは困難であった。地域内の相互扶助組織、株内や講組は親類の人と同等、それ以上の存在で出役として労働力も提供していた。葬式はもとより、家の新築・改築、屋根の葺き替え(茅葺き)、田植え、神祭り(山の神、お日待ち)、盆行事(火とぼし、新盆)等、欠くことのできない付き合いであった。

木沢村木頭字花溝地区の29軒は三つの株内(講組)で構成され、仁義株^{じんぎ}8軒、川尻株9軒、湯浅株12軒に分かれている。また、坂州向エでは、古くからある講組(ここでは株とは言わない)とは別に、第二次大戦後に新しく居住した人たちが「新講組」を作り、次に「新々講組」ができるなど、集落内の講組の数は時代により変化はある。現在の過疎化は講組の構成員[講中]の数を減らしている。

3. 葬式の準備

死亡が確認されると、近くの親類、講組の長に知らせる。家族は神棚に白紙を張る。家の内外の掃除をするなど葬式の準備に掛かる。

1) 飛脚

講中(講の構成員)の元気な男二人が1組になって死者の親類縁者に知らせに行った。上那賀町、木頭村辺りまでは徒歩で行き、遠方は電報を使った。飛脚が訪ねて来た家では食事を出しもてなしている。

* 徳島市丈六町長尾62-8

講組の長老は寺に行き、住職と相談の上、葬式の日取りを決めた。大役である。その後、葬儀の日程を在所中に知らせた。[通信網の発達後は、飛脚の仕事は寺と火葬場の調整を行うだけになった]

2) 死者

[近年、病院や老人ホームで亡くなることが多くなっている。死者を連れて家に帰ってきて、雨だれ(軒下)を通るときに「〇〇、家に帰ってきたぞ」と叫ぶ]。

3) ユカ

血縁者がワラ縄のたすきを掛け、タライにぬるま湯を入れ死者を座らせ身体を洗い清め、ひげを剃る。[病院で亡くなることが多くなり、身体を形式的にアルコールで拭くだけである]

死者を表の間に北向きに安置し、一番上には一張羅の着物を上下逆さに掛ける。枕元に刃物(カミソリ)、線香は1本、火を絶やさない。本人の湯のみにお茶を入れて供える。花シバ、枕の飯(後述)を置く。

4) 旅立ちの服装

白木綿1反で造った三角の頭巾、着物、^{きょうかたびら}経帷子を左前に着せ、帯を結び、手甲・脚ハンを着ける。白足袋を左右反対にはかせ、ワラ草履をその上にはかせる。(傍に置くだけ)首にはサンヤ袋を掛け、その中に米、麦、アワ、ゴマ、大豆の五穀の種、6文銭(5円玉一枚)、その他の好物を入れ、手は合掌させて数珠を掛ける。傍に杖を添える。

5) 入棺

棺は竹の輪の掛かった立桶で(カメではない)、前述の着物を膝にかけ、生前愛用していた物を入れ、帰ってこないようにと鼻緒を切ったワラ草履も1足添える。[入棺は式当日に行われていたが、現在はお通夜までに行う]

出棺までに、桶に赤い紙に「南無阿弥陀仏」と書いたネブツシ(念仏紙)を、下から順に隙間の無いように張る。蓋には平たく張って被せる。紙は長福寺の庵に置いてあり、使った分は後で補充しておく。[現在ネブツシは葬儀屋にあり、寝棺の中に1、2枚入れるだけである]

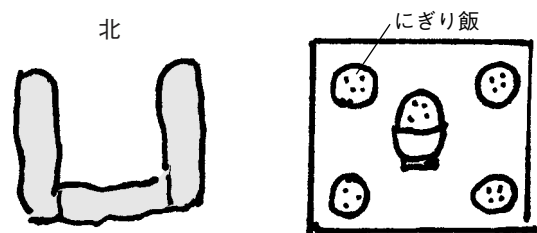
4. 講組みの役割 前日までの仕事

1) 夜とぎ お通夜

喪主が講組の者に葬儀の協力を依頼。葬式前夜、親類縁者と、講組からは各戸男女2名が集まり、相談して役割を決め、夜明かしをした。集まった人には茶菓子、果物、一杯酒、五目飯で接待した。[夜とぎで役割が決まると、簡単な食事の後、講組は解散する。親類縁者だけが残り、夜とぎをするようになった]

2) 枕の飯

- ・クド 死者の飯を炊くため死者の家の嫁が作る。雨だれ(軒下)に石3個で作る。クドの焚き口を北向きにする。
- ・クドに使った石は、後日、谷の清流に流す。
- ・米3合を洗って鍋に入れ、クドにかける。
- ・板で杓子を作る(後日墓に持って行き立てる)。
- ・飯が炊けたら4個のにぎり飯と本人が使っていた茶碗に高盛にご飯を入れる。八寸膳か本人が使用していた箱膳の四隅におにぎりを置き、真ん中に高盛の茶碗を載せ枕元に供える。枕の飯は仏さんの弁当となる。



クド

枕の飯

5. 葬式当日の準備

講組の1軒から男女2人が手伝いに行く。それぞれが講米(参列者・手伝い人などの食事用に当てる)・薪・料理物を持参する。料理は女性が担当し、参列者の接待をする。[現在は講米の代わりにお金を集める所、集めない所もある]

男性の仕事

1) 土葬の準備 棺桶を埋める穴掘り、棺桶の上に乗せる蓋石・その上に置く枕石を運ぶ。大変な作業であった。

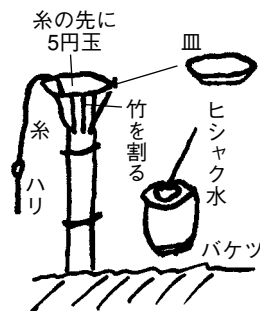
2) **ワラ細工** 年配者の仕事、アシナカ4足、ワラ縄2本(9尋、13尋)、タスキ4本、コモ(棺に被せる)。ワラは叩かない。縄は逆縄(撚り方が反対)とする。

3) **竹細工** 竹を切ってくる。4本旗用(笹つき)、花立て(青竹で1対)、水まつり用の竹、柄杓1、青竹の杖。

4) **天蓋**、**卒塔婆**7本、**位牌**大小2枚、大は野位牌(野辺に祀る)小は仏壇に祀る。

5) **祭壇** 真言宗では、右 不動明王、中 十三佛、左 弘法大師の掛け軸を掛ける(講組みで持っていたり、寺から借りる)。[祭壇や飾りは葬儀屋がする]

6) **水まつり** 竹は庭の隅に立て、竹の上に皿を1枚載せ5円玉の穴に糸を結び、その先に木綿針を付けて垂らす。傍に水を入れたバケツを置きヒシヤクを添える。会葬者が水まつりの皿に水を入れる。次の日に墓に持っていく。(木頭)



水まつり

6. 葬式

坊さんが戒名を与え、卒塔婆に文字を書いてから読経が始まる。遺族、親族、講組の焼香が終わると**出立ちのご飯** 五目御飯、味噌汁、冷酒などを食べる。棺を座敷の中央に移し最後の別れをする。

別れの水 シキミの葉で参列者が死者の口を濡らし、別れを告げる。この時親類縁者が「○○ですよ」と自分の名前を言いながら経帷子を棺に入れたりする。棺に蓋をし、講組が縄を掛ける。出棺の準備が整うと、供えてあった49の団子クギヌキ(もち米1升で作る)を参列者に全部食べてもらう。

1) 野辺送り(出棺)

位牌は長男か近親者、棺を担ぐのは孫など血縁の濃い者2人、弁当持ちはその家の女性、この4人はアシナカをはき、ワラ縄のタスキを掛け(タスキは後ろで交差させない)、和紙で作った三角頭巾をつける。

棺は座敷から外に出る敷居まで孫(それに準ずる人)が担ぎ、敷居から門まで孫も含め身内が担ぐ。門から墓地までは講組みが交代しあって棺を担ぐ。

2) 葬列

①鉦を先頭に、②4本旗(それぞれの旗には諸行無常・是正滅法・生滅滅己・寂滅為楽と書かれている)、③野位牌、④弁当持ち、⑤棺、⑥天蓋、⑦卒塔婆、親族と続き、庭でワラ火を焚き、左回りに3回回って門から出て行く。茶碗は割らない。出棺のとき「○○、ええとこへ行けよ」と声掛けをする。

3) 埋葬

墓地に着くと、出棺の際、最初に棺を担いだ人が棺を穴に埋める。棺の上に弁当を包んで載せ一緒に埋め、茶碗は持ち帰る。蓋石を載せ、花立てを1本だけ立てる。担ぎ棒は短く切り、アシナカも横緒を切って捨て、履物を履きかえる。葬式は夜の儀式だった。提灯の灯は一度消し、もう一度点け直して家に帰った。

岩倉では旗の竹を墓の四角に立て、それぞれを中央に折り曲げお堂の代わりにしている。

家に帰ると入り口に置かれた箕の中に入れてある塩を採って身体にふりかけ、清めてから家に入る。

4) 墓なおし

翌日墓なおしを行う。蓋石の上に「枕の石」を足で寄せて載せる。前日残した花立て1本を持って行き、前日に立てた花立てと並べ1対にする。持ち帰った茶碗も、蓋石の上に載せ、供え物入れに使う。お盆・彼岸には祀り物を入れたり、普段は水入れとする。

7. 禁忌

- ・お料具・供え物にはネギ・肉・魚は使わない。
- ・お料具は二組作る。
- ・十二支の合年の者は墓地へも火葬場にも行かない。
- ・死者の配偶者と同じ干支の者は墓地へ行かない。
- ・葬式が寅の日のときは朴の木でトラ除けの5角形の卒塔婆を作る。
- ・土葬の日が友引のときは夜の12時を過ぎてから墓地へ行く。

8. 祭 祀

1) 六日の仕上げ

死亡して6日目に親類・講組が集まって法要を行うが、飛脚の手間などの都合もあり、埋葬して墓から帰るとすぐ行くようになった。親族、講組が集まり一緒に食事をする。精進落としといって料理に魚を使う。

床の間の掛け軸を不動明王を左に、弘法大師を右に喪主が架け替える。

2) 満中陰

7日目ごとに墓に参り、僧侶が書いておいた卒塔婆を一本ずつ立てる。満中陰、49日（三月目に当たるときは35日）には親族が集い、法要をする。僧侶に経を挙げてもらう。

9. おわりに

明治・大正ごろまでは地域に死者が出ると講組は大変であった。葬式に必要な物資は近しくなく、隣村まで買出しに行っていた。岩倉方面は木屋平まで、沢谷は神山や福原村へ、坂州も福原や鷺敷方面まで行かねばならなかった。

坂州で、平成6年・平成11年に一体ずつ土葬が行われている。なんでも「焼かれると熱いから」との遺言があったそうだ。墓地に案内してもらい写真を写すことができた。これは例外であって、今では火葬が行われ、阿南市の火葬場へ運んでいるとのことだ。そのため講組の仕事は減少し、葬式の形式も変わっていった。夜の葬式も昼間となった。

これまでに筆者は県内数カ所で葬送についての調



平成11年に行われた土葬の墓

査を行っている。徳島県は真言宗での葬儀が主流で、大筋では似通っているが、細部では地域によって違いが見られる。

例えば、土葬で棺を埋めるのは同じでも、上に載せる石の呼び名が、佐那河内村 フタ石、穴吹町クモ石（ジゴク石）・拝み石、土成町 クモ石などの違いがみられる（載せ方や形にも違いがある）。木沢村では前述したようにフタ石というが、その上に「枕の石」を置く、しかも手を使わないで足で載せるという話を他で聞いたことはない。その枕の石には、梵字が書かれている。

埋葬を終えた後の清めの方法も、土成町や穴吹町では青竹である世とこの世の境目、「ウマ」と呼ぶ結界を作り、跨ぐことで死者との縁を切り、清めとしている。海部川筋でも「コマシ」といってやはり青竹を跨ぐ方法をとっている。木沢は塩払い、佐那河内は塩を跨ぐとか、これにも違いがある。

木沢村における結界は「雨だれ」（家の軒先、雨の雫が落ちる所）ということになるのではないかと考える。枕の飯を作るクドを据える所、病院から家につれて帰った時も、「雨だれ」で家に帰ったことを死者に知らせる声掛けをしている。

このように一つ一つを細かく分析して、県内の違いをみるにはまだサンプルが少なく、今後の調査の必要を感じている。

埋葬は火葬をするようになって棺桶が無くなり、すべて寝棺に変化している。また交通網の発達はこの出入りを容易にし、講組に代わって専門の葬儀屋が取り仕切るようになって、葬送の形態は簡便化し変化した。斎場を借りて告別式を行うようになった



平成6年に行われた土葬の墓

ことでも地域の連帯は薄れている。

講組みが主になって死者を埋葬していた時代は過去のものとなり、今後も地域での役割は減っていくことだろう。

調査を行った時点では、まだ町村合併は行われておらず、古い町村名で記載していることについてはご容赦願いたい。

本調査にあたり、ご協力下さった方のお名前をここに挙げ、お礼に代えさせていただく。

木頭 木村 忠氏（昭和2年生）

坂州 築原宗市氏（昭和11年生）

また、木沢村内を案内してくださった民俗学会
橘 禎男氏にお礼を申し上げます。

文 献

木沢村誌編纂委員会編（1976）：『木沢村誌』木沢村。

木沢村教育委員会（1988）：『木沢村の民俗』木沢村。